

九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 No.310
2018(平成30)年 1月25日(木)発行 犬派

明治150年何かめでたい ■私たち東北地方やその住民(蝦夷・エミシ)にしてみれば、ヤマトタケルの時代から、特に明治150年は差別や迫害、搾取され続けた歴史です。現在も「植民地」と呼ばれ、核災(原発事故)で苦難を強いられています。■お人好しの福島県民と嘲笑され、素直に明治150年を祝うことなどできません。明治への復古や国粋主義、郷愁や歴史の美化でなく、その光と陰などの検証が必要です。

今年 ・西暦2018年・平成30年・戊戌(つちのえいぬ・ほじゅつ)
・明治では151年(満で150年)
・大正は107年(満で106年)
・昭和は93年(満で92年)
○原爆投下や終戦から73年
○日本国憲法施行から71周年

祝成人

今年も「憲法」遵守をアピール

1月7日(日)南相馬市成人式:会場ゆめはっと

■「はらまち九条の会」が新成人に『憲法』冊子(1971年旧原町市発行の復刻版)の手渡しする活動は、2008年から2016年まで9年間続けました。■昨年からは、南相馬市が市発行の『憲法』冊子を新成人に配布しているので、本会では「憲法チラシ」(会報No.309)と「ピース9 ナインコーヒー」<写真>を手渡し、今年は事務局員など14名で約460名の新成人に「おめでとう」と声をかけながら手渡しました。■政治に無関心でなく、「日本国憲法」を遵守し人権保障や平和維持に努め、無責任な政治家にはだまされないように、ともに学んで行きましょう。



▲会場の原ノ町駅前市マルチメディアホールでは、NHK福島支局が取材。12月8日テレビニュースで報道されました。

中村敦夫・朗読劇 会場は満席 一体に

◇原発への理不尽さや怒りを、元原発技師に扮して福島弁で語る中村さんの朗読劇「線量計が鳴る」は、12月2日に開催され、会場は立見が出るほどの満席で、演者と一体になった充実の2時間でした。



熱演の中村敦夫さん▲

「甲状腺がん子ども基金」へ寄付

○右の<会計報告>の残高全額を、中村敦夫さんのご意向に添い「NPO法人3.11甲状腺がん子ども基金」(代表崎山比早子)に、12月10日に寄付しました。福島県内の「小児甲状腺がん・疑い」は194人(昨年10月)に増加していて不安です。○報告と感謝を申し上げます。

<上演会計報告>

◇収入・入場券(@1500円×157枚)	235,500円
◇支出・ポスター・チラシ印刷	27,426円
・演者謝礼・交通宿泊費など	124,000円
・スポットライト借用経費	12,220円
・事務局準備経費・雑費	14,056円
◇残高(収益)	57,798円

改憲は絶対ダメ 安倍9条改憲NO! 3千万人署名

○もう署名は提出されましたか。全国で3千万人、南相馬市で1万6千人が目標です。
○何名分でも署名が集まりましたら、お手数ですが事務局員にお届けください。

2017年・各国の核弾頭保有数

ロシア 7000	パキスタン 140
米国 6800	インド 130
フランス 300	イスラエル 80
中国 270	北朝鮮 20
英国 215	

アメリカが“核なき世界”を放棄

日本政府は米国に追随し 「高く評価する」

●2月2日、トランプ米政権は、非核攻撃への報復にも核を使い、さらに使いやすい小型核兵器の開発も明示した。●これは、オバマ前政権の「核なき世界」を放棄し、世界の「核兵器廃絶」の歴史に逆行する狂気の政策です。●ところが、さらに失望し

たのが、3日河野太郎外相談話で「日本政府は高く評価する」と発表したこと。「唯一の被爆国」という日本の立ち位置も全く念頭になく、すべて米国に隷属し言いなりで情けない。

○2016年4月から日本被団協が主導する、すべての国に核兵器禁止条約の締結を求める「ヒバクシャ国際署名」に、1月8日現在、日本国内の自治体首長（1788）の過半数（1015）が賛同しています。ICANがノーベル平和賞を受賞。核兵器の抑止力などもう無意味な考えです。

○今年こそ日本は、アメリカへの忖度をもう止めて「核兵器禁止条約」を批准すべきです。子どもや孫たちのためにも、「戦争しない国・日本」を堅持し「核兵器のない世界」が大人の務めです。

子どもたちに再び こんな悲しい思いをさせてはいけない

ローマ法王が「これが戦争の結果」と、“焼き場に立つ少年”の写真を配布

1945年9月原爆投下直後の長崎「死んだ弟を背負い、焼き場で順番を待つ少年」

▶アメリカ従軍カメラマンのジョー・オダネルが被爆地の長崎で撮影。死んでしまった幼い弟を背負い、川岸に設けられた死体焼き場にやってきて、直立不動の姿勢で順番を待つ十歳ほどの少年でした。（小学館発行の写真集『トランクの中の日本』九七ページに所収）



ジョー・オダネル氏▲
○1922年5月米国生まれ。○2007年8月9日、長崎原爆投下の日86歳で死去。



▲妻の坂井貴美子さん○会津若松市の出身。○日米各地で「原爆写真展」を開催。

■昨年の末、バチカンのローマ法王・フランシスコは教会関係者に、1945年原爆投下直後の長崎で、アメリカ従軍カメラマンが撮影した写真「焼き場に立つ少年」をカードとして配布しました。■法王はこの写真に「戦争の結果」とメッセージし、カードの説明には「亡くなった弟を背負い、火葬の順番を待つ少年。少年の悲しみは、かみしめられて血のにじんだ唇に表れている」と書き加えられている。■ローマ法王は「核なき世界」を訴え続け、昨年11月に核軍縮をテーマにしたシンポジウムの参加者に「核兵器は人類の平和と共存しない」と述べ、核廃絶を求めるメッセージを全世界に投げかけています。

◇この少年と同年齢の 若松丈太郎さんは、詩『死んでしまったおれに』を創作。『若松丈太郎詩選集一三〇篇』J・ラック社に収録されています。

◇また、吉岡栄二郎著『「焼き場に立つ少年は」 何処へ』長崎新聞社・2013年に出版。少年は誰か、調査しますが不明のままでした。

◇さらに、16歳の時長崎で被爆した深堀好敏（ふかほりよしとし・88歳）さんは、「爆心地周辺での撮影ではないが、戦争の惨禍を示すものだ」